

西田とベルクソンにおける「空間」の意義について

——行為的自己と逆円錐の図式——

根 田 隆 平

その思索の初期から中期にかけて、西田はベルクソン哲学に深く共鳴しつつも、自らの根底にある哲学的直観とのずれを次第に意識化し、様々な言い方で間欠的にそれを表明していくが、後期になると、「ベルクソンは時間的なものを主として空間的なものを従と考えた。私はそれを逆に考えるのである」(III293)、

と大変明解に表現されるに至る。この言葉は「行為的直観」の立場からのものであるが、この言葉の含意を理解するための前梯的作業として、ここでは「行為的自己」の立場において両者を比較することにした。『自覚に於ける直観と反省』(1917・II)以降

ある意味でベルクソンと決定的に袂を分かち、絶対無の場所へと突き進んでいった西田は、そのいわば形而上学の高みから下りてきたところ(『無の自覚的限定』(1932・VI)および『哲学の根本問題』(1933・VII))において、既に「空間」についてのベルクソ

ンの考え方を批判し、それとの対照で自説を述べている。その批判の内実を検討することが本稿の目的である。

1

『自覚』三九節以降で西田が達した「絶対自由意志」の立場において、時間は意志として語られ、そこではじめて西田はベルクソンの純粹持続をはっきりと批判するようになる。また、ここにみられる批判は基本的には後期においても引き継がれているように思われる。そこでまず、『自覚』三九節以降における西田のベルクソン批判を集約しているテキストを取りあげて検討しておきたい。はじめに次の箇所Aをみてみる。

A (1)ベルクソンは純粹持続に於ては一瞬の過去にも還ることはできないと言うが、創造的進化の状態に於ては却って過去全体

が現在として働くことができる。(2)我々は創造的進化の純なる状態に達することができればできる程、我の深き根底に達し、過去を現在化することができると考え得るのである。(3)ベルグソンは『物質と記憶』に於て記憶の全体を円錐形に比し、その底面を過去とし、その頂点を現在と考え、円錐はその底面から絶えず頂点に向つて進み行くと考えて居るが、我々ができるだけ円錐の広き底面に返つて、そこからその頂点に向かって集中すればする程、過去全体が現実となると考えることができる。』(II 266)

ここではまず、西田が(3)で円錐形のメタファーに言及していることが注目される。西田はこの著作の他の箇所、および、他の著作において屢々このメタファーに閑言しているが、これはベルグソンが『物質と記憶』(第三章)で提示した〈逆円錐の図式〉〔以下、〈図式〉と略す〕である。また一方で、ベルクソン解釈において、その〈持続〉観念をこの図式で理解することは正当であるように思われる。西田が説明している通り図1⁽³⁾において、Pは現在(「身体」)を、Eは世界の空間面を、円錐形の底面は過去一般を、円錐形の全体は記憶の全体を、おのおの表している。この図に示されているように、時間の進行は、現在から過去(Pから底面)へという方向と、円錐の内部からPを突き抜けていく未来への方向という、互いに方向が逆の二重の運動から成り立っている。純粹持続とはこの二重の運動が全く滞ることなく行われている状態である、と(粗略な言い方ではあるが)とりあえず解釈すること

ができる。

ところで西田は、明らかにこの〈図式〉をここで思い浮かべつつ、純粹持続について述べている。従つて〈図式〉における二重の運動を認めているはずである。とすれば、西田が『純粹持続に於ては一瞬の過去にも還ることはできない』と言うのはどういう意味だろうか。次の引用Bは先の引用の少し後に出てくる文章である。

B 「(1)意志は所謂時間的關係を超越して過去を現在となすことができるとしても、我々は尚意志活動其者の順序、というものを考えることができるであらう、意志の活動は一々事実であつて、その間に動かすことのできない順序があると考えることができるであらう。(2)ベルグソンの一々性質的に異なつた繰り返すことので

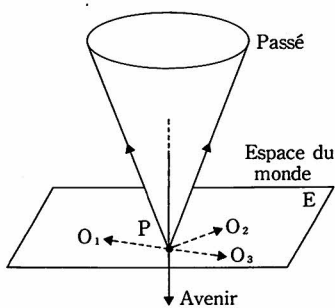


図1

きない実時⁴ la durée réelle というのは之を意味するのである。(3)併し余の考えでは意志は過去から直線的に歩み来り、又未来に向つて直線的に歩み去るのではない、意志の進行は或一点を中心として円状に広がり行く波動的進行である、意志は何時でも同一の中心から

働く、意志の中心即ち眞の自己は何時でも現在であるのである。

(4)意志の動かすべからざる順序という如きものを考えることもできるであろうが、此の如く順序づけられた意志は既に化石せられた意志であつて、生きた意志ではない、眞に生きた意志は全然自由でなければならぬ。(5)自由に種々の経験の立場を取捨し、一つのアプリアリから他のアプリアリに自由に移行行くのが眞の意志の活動である。(6)過去を翻して現在となすのが意志の作用である(7)意志は順序を付けられるべきものではなく、順序を付けるものである。』(I 269-270)

この引用の(1)で、西田は〈図式〉における二重の運動について、一旦は認めているように思われる。引用A(3)での「円錐はその底面から絶えず頂点に向つて進み行く」という表現(この表現はそれ自身曖昧であるが)は、円錐内部での二重の運動を認めた上で、円錐そのものが直線的に突き進んでいく、と西田は解釈していると読むことができる。またそうでなければ、B(3)「過去から直線的に歩み来り、又未来に向つて直線的に歩み去る」という時間〔意志〕は、ベルクソンの時間どころか、いわゆる通俗的時間觀念に過ぎなくなってしまう(何れにせよ持続と〈図式〉との關係についての西田の理解には曖昧さがある)。しかしまたそう解釈したとしてもなお、(1)で「意志活動其者の順序」が考えられてしまふものとして西田がベルクソンの持続を考えていることには変わりがない。けれども、順序、というものは「質的継起が同時性と

なり、空間内に投影されて」⁽⁵⁾はじめて考えられるものであり、かつ又、持続内部の継起と持続そのもの(「意志活動其者」)の継起との間に区別があるはずもない。従つてベルクソンの持続に順序をつけることなどはできない。〈図式〉はそれ自身空間的なメタファーであり、何か直線的・一方向的に進行するイメージを抱き易いが、そのイメージには意味がない。ベルクソンが「継起」「流れ」「進行」「前進」等と言う時、いかなる意味でも空間的なイメージによつてそれを考えてはならないのである。それ故、引用Bの(3)(6)(7)で西田が述べていることこそがベルクソンの持続において妥当する。まさにA(3)「我々ができるだけ円錐の広き底面に返つて、そこからその頂点に向つて集中すればする程、過去全体が現実となると考えることができる」のであり、そこに眞の自由があり創造がある。もとより、西田の「絶対自由意志」の立場それ自身がベルクソンの「持続」の考えと同じであるというのではない(例えばB(5)が、ここでの西田のベルクソン批判には混乱があるように思われ、またその限りで両者の違いも判然としたものではないと言わざるをえない。

2

さて、「自覚」以降、西田が再び時間について論じ、その関連でベルクソンに言及するのは、後期西田の入口とも言うべき「無の自覚的限定」においてである。ここでも集約的な二つのテクス

C (1)ベルグソンの純粹持續という如きものは私の人格的行為の内的連続という如き立場を何処までも徹底的に押し進めたものと言うことができるであらう。(2)行為的自己的の立場に於て自己の底に何処までも自己を否定すると共に自己を生むもの、我々がそれに於て没すると共にそこから生れると考えられるものを見る時無限なる生命の内的連続という如きものが考えられるであらう。

(3) 我々がそれに於て没入することによって生れるという意味に於て、「生命の内的連続」という如きものを考えることもできる。

(4)併し我々の眞の生命というべきものは、單にかかる意味に於て考えられるものではない。(5)絶対の他に於て自己を見る即ち絶対の死から蘇るという所に、眞の生命と考えられるものが考えられるのである。(6)時というものが單なる連続として考えられるのではなく、非連続の連続として考えられねばならぬ如く、眞の生命というものも、かかる意味に於ける連続として考えられるものでなければならぬ。(7)生命の一面には空間性、物質性がなければならぬ。(8)ベルグソンの自己というものは、單なる直観的自己であつて行爲的自己ではない。(9)ベルグソンの自己には死というものがないと共に、それは眞に生きて働く自己ではない、眞の客観性というものを有たない。」(Ⅵ42-3)

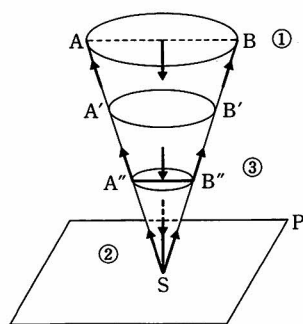


图 2

Figure 2 is a diagram illustrating the concept of 'non-continuous' (非連続) movement. It shows a cone with a dashed line representing its axis and a solid line representing its surface. The cone is divided into three sections labeled ①, ②, and ③. Section ① is the top part, section ② is the middle part, and section ③ is the bottom part. The cone's base is labeled P. The axis is labeled S. The surface is labeled A, A', A'', B, B', B''. Arrows indicate the direction of movement from the top towards the base.

動①に加えて必要であるということをここで西田は述べていると解釈しうる。その時、円錐形の頂点は世界の空間面に接しているのだから、(7)「生命の一面には空間性、物質性がなければならぬ」と言われることになり、ここでの西田の批判は、ベルクソンの自己には「空間性」がないという一点に集約されよう。ところで〈図式〉自体が示しているように、ベルクソンの自己(生命)はその頂点を世界の空間面に接している自己であり、明らかに空間と無縁ではない。それではなぜ西田はそう言ってベルクソンの自己を批判するのであるか。次の文章は、引用Cの約一年後に書かれたものである。

D 「(1)ベルクソンでは空間性というものは、何処までも唯、純粹持続の弛緩として考えられるのであるが、斯く考えられるかぎり、我々の人格というものは夢幻的であって、実在的ではない。(2)時間が真の時間である為には、空間というものは何処までも単なる時間の弛緩であってはならぬ。(3)それは絶対否定の意味を有していなければならない。(4)それが弛緩の極限と考えられても、純粹持続は夢の延長に過ぎない。(5)絶対の否定から蘇る所に、我々の真の人格的自己があるのである、失われたる時が見出されたる所に、真の純粹持続があるのである。(6)私は私の所謂現在が現在自身を限定するという意味に於て、真の純粹持続という如きものが成立するのであると思う。(7)我々の人格が緊張して過去を掻き集めると言うことは、一面に自己自身を限定する現在を広げ

ることを意味して居なければならない。(8)唯物論者の言う如く物質から意識が出ると考えられないと共に、一瞬の過去にも還ることのできない純粹持続の何処からも、弛緩が出て来様はない。」
(III82)

この文章の終わりの(8)「一瞬の過去にも還ることのできない純粹持続」という批判については既に検討した。ここでは「緊張」および「弛緩」というベルクソンの概念が新たに登場し、その概念によって同じ批判が引き継がれている(6)(7)。しかし(1)から(5)までは、純粹持続から「弛緩が出て来」ることを認めた上での批判と読める。純粹持続の弛緩の極限として考えられる空間は「絶対否定」の意味をもちえない、というのがその部分の批判の要点であるが、それを図2で示せば、円錐形の頂点Sが空間面に接するその極限でばやけている(「夢の延長に過ぎない」)ことになり、その時たしかに、先の引用C(5)(6)の「絶対の死から蘇る」「非連続の連続」といった運動②の意味が失われることになろう(運動③)。しかしこの解釈が正しいとすれば、西田の批判の論拠には問題があることになるように思われる。西田は、ベルクソンの自己が関わる(空間的なもの)と、弛緩の極限において考えられる空間とを無造作に同じものとしているが、実はこのことは注意を要するのである。ベルクソンの自己は、(空間的なもの)と関わりながら、しかもあくまで空間から根本的に区別される。持続は空間性をその成立の条件としながらも、それと空間との間

には「本性の差異」があるのである。⁽⁸⁾そしてこの点に注意を払えば、点Sはばやけない。運動②の意味は回復され、空間は（そう言いたければ）「絶対否定の意味」をもつ。

更に、ベルクソンの自己における現在と過去との関係についても一言しよう。実際、図2においてA、B、A'、B'といった円錐形の無数の切り口で表される過去は、潜在の実在性をもったものとして現在と「共存在」⁽⁹⁾しているものであり、しかも現在から過去へは「飛躍」⁽¹⁰⁾によってしか到達されない（現在と過去の間には「本性の差異」がある）。ベルクソンの自己において、現在から過去への移行はなく、つまり現在と過去との関係は、「存在論的には」「現在（過去）は過去（現在）においてある」とでも言う他ないようなものである。

従って、ベルクソンの自己とは、空間（現在）と時間（過去）との「矛盾的自己同一」として成立していると言いう。運動①と運動②はそもそも独立には成立しえず、「飛躍」を含んだ二重の運動が持続の不可分の緊張状態（諸継起の相互浸透）に伏在している。それ故、ベルクソンが、「我々は、自己の人格の激しい自己収斂によって、去りゆく過去を取り集め、これを緻密で不可分のまま現在の中に押し入れなければならない。かくして過去は、現在の中に忍び込む事によって、現在を創造するであろう」と述べる時、それはD(7)「一面に自己自身を限定する現在を広げることの意味」⁽¹¹⁾していると解釈することができ、また、その現在は

「絶対的に新たな」⁽¹⁴⁾ものとして「非連続の連続」である、と言うことができる。

3

以上、あまりに西田内在的（ないし図式的）な理解を避けるという意図もあって、西田が直接ベルクソンに言及している箇所を取りあげてベルクソン解釈の側から検討してきたが、その限りでは西田の批判にも拘わらず両者の違いは明らかではなく、とりわけ、西田による空間の絶対否定性の強調の意義は失われてしまうように思われた。しかしながら、「絶対の死（否定）から蘇る」「絶対の他に於て自己を見る」「現在が現在自身を限定する」といった西田独特の表現は、個物と一般者の場所的弁証法としての西田哲学それ自身に即してはじめて理解されるものであることは言うまでもない。そこで、西田がベルクソンを批判しつつ「空間性」という概念に託して語ろうとしたであろうことを（簡単にではあるが）今度は西田の側から見直しておきたい。

この時期の西田の（「行為的自己」における）時空論の背後には、相互に総て「即」で結ばれる弁証法の諸契機（個物の自己限定（契機一）、個物と環境との相互限定（契機二）、個物と個物との相互限定（契機三）、一般者の（場所的）自己限定（契機四））が控えており、それがその時空論に反映していると考えられる。⁽¹⁵⁾西田のD(6)「現在が現在自身を限定する」という時空論は、まず

最初の二契機によって規定される。⁽¹⁶⁾ここまでの検討をこの二契機に即して言い直せば、〈契機一〉は運動①に、〈契機二〉は運動②に対応し、西田の批判にも拘わらずベルクソンの自己は両契機を（不可離のものとして）備えている、と論じてきたことになる。西田の時空論に即した図を描けば（図3a）、現在は（既に）円環である。運動①と運動②におのおの対応する運動④と運動⑤は完全に運動しており、円錐形の「頂点が深くなればなる程、その基底が広く」（W381）なり、世界の空間面において遂には無限大の「周辺なき円」となる。

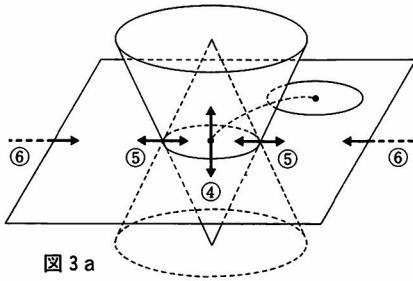


図3a

但し、西田によれば、この「周辺なき円」は「無の一般者」の自己限定（〈契機四〉）という意義をも同時に有していなくてはならない。この契機があつてはじめて個物と環境の弁証法は「過程（ex. W346）」性を脱することができ、個物の自由と独立が保障される（W352）。と西田は言う。なるほど（我々の側からすれば）、1でみたようにベルクソンの持続は少なくとも西田が批判するような意味では「対象（ex. II 276）」性を有し

てはいないように思われたし、また2でみたようにベルクソンの自己は空間性・物質性を備え、環境（空間）と「弁証法的」関係にありながらも環境から独立（超越）したものであった。しかし、〈契機一〉（運動④）と〈契機二〉（運動⑤）とが完全に連帯しているというだけではなく、〈契機四〉の意義からすればむしろそのような考えを逆にして、「時を越えたものによって時が限定せられる」（W382）と考えるてはならない（運動⑥）、と西田は言う。「一方に個物的限定の意義が深く考えられれば考えられる程、之に対して絶対の一般的限定というものが考えられねばなら」（W151）ず、C(9)「真の客観性」はそうしてはじめて保証される。これが西田の主張なのである。しかもその時更に、「単に頂点が深くなると共に基底が広がるというのではなく、基底から基底に移るという意味がなければなら」（同）ず、「周辺なき円」は「至る所中心となる円」（同）となり、個物（中心）と個物（中心）の「並列的關係」（W137）が成立する。ここに個物同士の相互限定（契機三）が可能となる。西田の批判に実質を認めるべきであるとするならば、それはこの〈契機三・四〉にこそ求められなくてはならないだろう。

特に、論文「永遠の今の自己限定」（1931）で「私に対して如何ともすることのできないものは汝である、真に私に対立し、真に客観的というものは自然でではなくて汝でなければならぬ」（W198）と述べている西田において、そもそも〈契機二〉は私が

汝に対するという意味合い（契機三）をはじめから強くもって
いたことが留目される。つまり、C(5)「絶対の他に於て自己を見
る」という西田の表現には、真の個物としての人格的自己が、そ
れと向き合う（やはり真の個物としての）他の人格的自己に対し
て限定される、という含意（契機三）がまず第一に読みとられ
るべきであるように思われる。「真の客観」とは私に対する汝で
ある。西田において真の生命は人格的生命であり、真の時間もそ
こにおいて成立する。また、C(6)「非連続の連続」という時間
「生命」の特性についても、「私と汝は絶対に他なるもの」であり
ながら「絶対に他なるが故に内的に結合」する（W381）と西田
が述べていることからわかるように、それは時間の特性であると
共に（あるいはその前に）私と汝の関係の特性であると考えら
れる。⁽¹⁷⁾これらの点に注目すれば、西田の批判の意味も明らかとな
ろう。即ち、西田は〈契機三（四）〉の欠如を、〈契機二〉の欠如
としてベルクソンの自己を批判していたのだと考えられる。更に、
この私と汝の関係について西田は、「自愛というものがなくして他
愛というものはない、併し真の他愛というものがなくして真の自愛
というものもない。普通には愛ということを単に自他合一と考え
て居るが、その根底には敬がなければならぬ、単なる自他合一
は愛ではなくて一種の衝動にすぎない。」（W378）とも述べている
が、これは人倫的世界の基礎づけであり、他人を自分とは独立し
た人格として承認し尊重しなくてはならない、そしてその上でそ

れが故に愛によって結合しなくてはならない、という要請であり
、為に他ならない。それ故こう考えてきた時、西田にとって「空
間」とは、そのような自覚ないし人格的な交わりを保障する超越
者的な意味合いを帯びていたのだと言うことができよう。西田が
ベルクソンに対して空間の絶対否定性を強調することの意味は
（それが全てではないにせよ）まずここに認められるように思わ
れる。

従つて、我々の1と2の検討に意義を認めたとしてもなお、西
田はベルクソンの自己とは所詮「連続を基として考えられた非連
続の連続」（W351）にすぎぬとやはり言うのでないかと思われる。
西田哲学もベルクソン哲学も実在探究の学であると言われるが、
西田にとって具体的現実的世界はまず何よりも人格的世界であり、
その倫理的要請をも含めて、そこから世界を統一的に説明してい
こうとした。それに対して、ベルクソンは倫理的要請を含み込む
ことはもとより、そもそも世界の統一的説明という課題をもたず
（というよりそれを積極的に避け）、あくまで事実的经验に示唆さ
れ裏打ちされる限りでの実在のあるがままの探究に留まったから
である。それ故、両者にとっての「空間」の意義の違いは、結局
のところ、哲学という営みに対する両者の態度の違いを映してい
るのだと暫定的に言っておくこともできるだろう。

しかし、以上はあくまでも後期入口の西田についての予備的一

考察にすぎない。ベルクソンにおいては、夢幻的自己からの脱却ということよりは、むしろ身体的衝動によって突き動かされているような状態、あるいは生活の必要に縛りつけられているような状態からの脱却の方が重要な問題であった。ベルクソンは、身体的生命による精神的生命の限定の意味を探究し、その限定からの解放の方途を追究することを自らの哲学の課題として明確に打ち出すのである。¹⁹ その意味でベルクソンの「空間」の捉え方にはそれ自身やはりネガティブなニュアンスがあることも否定しがたい。²⁰ それ故、時間と空間の主副をベルクソンとは逆に考える、という西田の言葉には「行為的直観」という立場においてより深い含蓄があると考えるべきであろう。例えば「ベルクソンの直観を音楽的と形容するならば、私の行為的直観というのは造形的とも言い得る」(III276) という対照の意味するところは何か。それはまた別にあらたに考察し直さなくてはなるまい。

* 西田からの引用はローマ数字で全集の巻数を算用数字で頁数を本文中に示す(強調は全て引用者)。

(1) 後期の西田は随所でベルクソンと自分の思想とをこの類の表現で対照させている(他に例えば XI354)。

(2) cf. P. Trolignon, *L'idée de vie chez Bergson*, PUF, p.534
《心身関係》と《持続》との関係については、他ならぬベルクソン自身が、『物質と記憶』を著した後にはじめてそれを了解したと述べている (*La Pensée et le Mouvant*, p.80 [白水社ベルクソン全

集 7・八八頁)。

(3) *Matière et Mémoire*, p.169 (但しこの図はベルクソン研究者 P. Trolignon の描いたものである (Op. cit., p.533))。

(4) この点に關して、本学会東京地区平成四年度第五回研究例会発表要旨を併せて御参照頂ければ幸いである。

(5) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, p.76 [全集 1・九八頁]。

(6) ベルクソンの図 (MM, p.181) をもとにしている。

(7) この解釈は恣意的に思われるかもしれないが、次の D の検討および本稿全体の論旨との繋がりにおいて理解して頂きたい。

(8) 持続と空間、物質と記憶などの間には「本性の差異」があるとするとベルクソン哲学の二元論が、例えば「緊張・弛緩」という概念によっていつのまにか「程度の差異」一元論に逆戻りしてしまうようにみえるという問題は、ベルクソン解釈上困難なものの一つであろう。ここでの西田の解釈もその点に関わるものである。たしかに持続の弛緩の極限としての空間と、持続との間には「程度の差異」しかないとするれば、空間は「絶対否定」の意味を失うであろう。この点に關してドゥルーズは、ベルクソンの「本性の差異」二元論は「程度の差異」一元論へと解消されるのではなくて種々の「差異の程度」に至るのであり「本性の差異」はそのまま維持される、という明晰かつ正当な解釈を提示している (G. Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF. 特に第五章を参照)。

(9) cf. Deleuze, *ibid.*, chap. II.

(10) *MM*, ex. p.162 [全集 2・一六五頁]。

(11) 前期メルロー・ポンティは、現象学的立場からこの点についてベルクソンを批判する。現象学に対する西田の批判的態度を考え合わせてもよいだろう。

(12) *L'Evolution Creatrice*, PUF., p.201 (全集4・二二九頁)。

(13) 特に次の箇所におけるベルクソンの記述を参照された。PM, p.142 (全集7・一六二―一六三頁)。

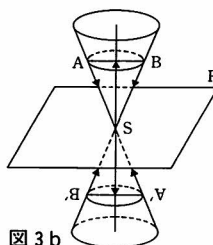
(14) EC, p.201 この部分 (pp.201-202) における純粹持続についての二箇所の記述は、それと〈図式〉との関係をよく示している。

(15) 必ずしも西田自身がこのように明確に四契機を分けているのではない。なお、ここでは〈契機二〉を個物が個物が生む(「内面的持続」という意味に解しておく)。

(16) この少し後に、時間と空間の関係は〈契機二〉と〈契機三〉によって明確に述べられるようになる (W224)。

(17) 『善の研究』において既に西田の時間論は自他関係論と相即している (I16)。しかしこの後すぐに、真の時間の成立のためには「彼といふもの」が入ってくる必要があると西田は述べることになる (W210)。

(18) しかしながらこの点においてすら、ベルクソン解釈の側からは言うべきことがあろう。西田は自己の「理性」に対して絶対的に非合理的 (W235) なものの即ち「私に対する汝」(同)と突き当たることを空間の絶対否定という言い方で表現しているが、ベルクソンにおいて、理性(知性)は直観に絶対遅れるという意味で、直観は(そう言いたければ)理性を絶対に超越したもの(「絶対的他」)なのである。私と向き合う他人と私との言語的な応答関係の場面を想定すれば(図3b)、両者は互いを対象として(理性によって)理解しているのではない。発せられた音(絶対に非合理的なもの(物質))から「飛躍」して一



挙にその〈図式的意味〉に到達する直観の働きがあつてはじめて両者の「対話」「応答」が成立している。つまり両者は空間面を隔て、互いの理性にとって「絶対の」他として区別されながら応答・対話している、という構制になっていると言えるのである (MM, chap. II, および *L'Energie Spirituelle*, chap. VI, (全集5・第六論文「知的な努力」)を参照)。

(19) cf. *Mélanges*, pp.453-502 (全集8・二一六頁以下)。

(20) 逆に西田においては、そういった課題は人格的生命に含まれる「矛盾」(W337)の弁証法という曖昧な運動の中に消えてしまうように思われる。また、「真の」「絶対の」ということ(私・汝関係)を基軸とした(この時期の)西田の時空論の枠組みには、相対的存在者の入り込む余地は実のところない、ということも指摘しておきたい。

(こんだ・りゅうへい、倫理学、東京大学大学院)